

若き歯科医へ

齊藤 佳雄

歯科医師は、臨床で勝負しなくてはならない。地道な研鑽の積み重ねと、日々の前向きな努力が、明日の優れた臨床への胎動となる。

今、歯科医師多難な時代をどう生き抜くかと問えば、自己研鑽しかない。臨床は本来が地味なものだ。大掛かりな補綴や高度先進医療といわれる治療法が、新しく良い歯科医療であるとは限らないことは明白だ。臨床は長期経過を経て、その善し悪しは自ずから解明される。5年や10年では結論は出せない。それ以下では論外だ。

これから、どのような歯科医師の道を進むかという時に、極めて重要なことは、自分の臨床が人としての良心を残し、より良き歯科医療になびく柔軟性を持っているうちに、いかに多くの優れた臨床に触れ、感動し、心打たれ、歯科医療への熱い情熱を胸に抱いたか、ということだ。

明日からの臨床に熱意と向上心を持って取り組むことが、自らを磨き、自己の臨床を確立することに結びつく。若き歯科医師に今望まれることは、基礎的な研修と共に、良き先輩の優れた臨床例に、疑似体験を含めて分野を問わず数多く触れ、早い段階で自分の進むべき方向性を見出すことだ。今、自分自身の身に付けた医療の基本姿勢は、いつになっても変わらない。どんなに歯科医師が増えても、「自分の臨床」というものを持っていれば、そしてその内容が術前術後を含めて、スライドとX線写真で10年を経てなお、ごく普通に他の歯科医師に提示し得る内容であるならば、我々の将来は全く安泰だ。治療内容の客観的記録を残すこと。その記録は、時を経て意味のあるデータとなる。

早く自分の臨床の確立を目指すこと。一刻を争って勉強し、良き歯科医療を地域の住民に与え続けよう。できるだけ抜かずに、できるだけ削らずに歯を残そうと努力する歯科医の姿を通して、患者からの信頼が芽生える。今、ただ画一的な治療方針で多忙なだけの日々を送っていても、いつまでも患者は殺到してくるとは限らない。自己研鑽を積み、総合診断力を養うことが重要だ。苦しいほど勉強には良いのだから、いい時代になったのかもしれない。

更にまた、歯科医療の知識・技術を習得する一方で、その他の興味のある、どのような分野についても造詣を深めていくことが必要であり、それらを通して自己の幅広い人格の形成がなされるならば、徐々にではあっても、その後の歯科医療には自信を持って取り組むことができると思う。

我々の、歯科医師としての人生にとって、残された時間はそれほど多くはない。心も身体も健康で充実した日々を目指そう。